この恋が実るまで、私は運命に立ち向かう

ぺこ菜ほのめ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この恋が実るまで、私は運命に立ち向かう

【Ｎコード】
Ｎ２９２５ＤＭ

【作者名】
ぺこ菜ほのめ子

【あらすじ】
屈折した想いを幼なじみに抱く少女・更紗（さらさ）。想いを抑えきれず、ついに告白をするものの、「女の子同士だから」と拒絶されてしまう。
幼なじみと幸せになれない世界なんていらない――絶望のあまり自殺した更紗は、５日前の朝に時間が巻き戻っていることに気づく。大好きな幼なじみと恋人同士になれる世界を求めて、更紗の運命に立ち向かう闘いが始まる。

＃　全６話程度で完結予定。
＃　主人公はメンヘラヤンデレクレイジーサイコレズ風味ですので
ご注意を。
＃　鬱展開多めですが、最後はハッピーエンドです。

永遠の世界　または　初めての告白

私――天川更紗（あまかわ さらさ）は、５月２３日月曜日の朝７時から、５月２７日夜９時の間の時間を繰り返している。

いわゆる「ループ」という奴だ。記憶は保持したまま過去の時点へと戻り、この時間線をやり直すことができる。

具体的に説明すれば、５月２７日夜９時を過ぎると急激に意識がもうろうとし、次の瞬間には始点――５月２３日月曜日の朝７時・自室のベッドの中へと戻ってきてしまう。

能動的にループを発現させた場合――つまり、自分から死を選んだ場合でもやはり同じく、痛みを感じる間もなく、すぐに始点へと戻ってきてしまっていた。

まるで小説やゲームやアニメで見た設定で、初めてこのループに気がついたときは驚愕したけれども、何度も何度もこの約５日を繰り返してきて、最近はこの非日常にも慣れてきた。

ところで「ループもの」と言えば、時間を繰り返すのには何かしらの原因があるはずだ。

たとえば、それは惨劇を回避するためだったり、大切な人の死を回避するためだったり、夏休みを楽しむためだったり――。

私の場合、それは「恋が実ること」なのだと思う。

世界一好きな人がいて、心を焦がすほどの強い想いを抱いているけれども、それは叶わぬ恋で――でも神様が私の恋が叶うようにと、何度も何度もチャンスを授けてくれているのだと思う。

忘れもしない――私の初めてのループは、５月２６日の木曜日、文芸部の部室で幼なじみ――二水（にすい）うるりに告白をした日だった。

二水うるり。１４歳。１１月１１日生まれのさそり座。
身長１５７ｃｍ。体重４５ｋｇ。ＡＢ型。
セミロングのおさげが似合う、ちょっと吊り目がちの可愛い子。
好きな食べ物はベーコン。嫌いな食べ物はタマネギ。
好きな色は空色、好きな動物はヒツジ。
思ったことははっきりという性格で、そして……趣味は小説を書くこと。
私とうるりは放課後しょっちゅう、４階図書室の奥にある「図書準備室」という6畳ほどの小さな教室にこもり、小説を読んだり、書いたり――文芸部としての活動を行っていた。
長机とパイプ椅子が狭い空間の真ん中に用意されていて、教室の隅には新書や古書が入ったダンボールがどっかりと積まれているので、ただでさえ狭いのにますます窮屈になっているような教室だった。
でも私は、この狭さが好きでもあった。それはやっぱり、ここが秘密基地のような感じがして、うるりとの距離がとても近かったから。

私たちは幼なじみ同士で、家も隣同士だ。
でもご近所だからという理由で、私たちは今の親友という関係になったのではない。
あの瞬間まで、うるりはお隣に住んでいる、通学班とクラスがたまたま同じな女の子程度にしか思っていなかった。近所の子たちと近くの公園で遊ぶことがあって、その中には私とうるりがいたけれども、それ以上の関係にならなかった。
その理由は思い返して見ると――私の内気な性格が原因だったように思う。

じゃあ、どうして私たちは親友同士になったのか？
小学４年生の頃、私はいじめられていた。

この弱気な性格が原因の一つではあったろうけど、最大の原因は「背丈」だった。
両親の身長を足して2で割ると、１７０ｃｍ。遺伝のせいなのか、私は身長がとても高かった。小学４年生のときには１５５ｃｍ、中学３年生の今では１７３ｃｍという大台に達していた。
これがコンプレックスであり、「出る杭は打たれる」というように、文字通り、自分たちとは異なるものを排除する純粋で邪悪な子供たちの、攻撃の的になるのに十分すぎた。
身長のことでからかわれたり、ものを隠されたり――そんな子供らしいいじめを受けて落ち込んでいた私を、絶望の淵から救い出してくれたのがうるりだった。
リーダー格の女の子と取っ組み合いの喧嘩をして勝利し、私に手をさしのべてくれた。
それから私たちは友達になって親友になって――そして一方的に恋をしたのだ。

この気持ちが恋心だと気づいたのは、中学に入学してすぐだった。
地元の公立中学校に入学して、でも……神様の悪戯なのか、私とうるりは別々のクラスになった。
これまでは同じクラスで、うるりはすぐ側にいて、それを当たり前のことだって思っていたけど、彼女と別のクラスになると、心にぽっかりと大きな穴が空いた気持ちになった。
その一方で、登下校時や休み時間に会うときとか、放課後、彼女に誘われるがままに入った文芸部の部室にいるときとかは、ぽっかりと空いた穴に暖かい気持ちがどっと注ぎ込まれて、心が溢れるような気持ちになることに初めて気がついた。
そして私は迷うことなく、自分に正直になってこの気持ちを受け入れた。
これが「恋」だっていうことを――。

それから二年ほど経過したけれども、何も進展はなかった。
私とうるりは「親友」という関係のまま。
よくお互いの親やクラスの子から、「二人は本当に仲がいいね」「二人は最高の親友だね」って言われる。
親友って、同性同士の関係を表す上では最高の称号だと思う。
でも――本当に私たちって親友なのかな？
親友って、相手を心から理解できる存在だよね？
だったら、私がずっと心の中で抑え込んでいるこの辛い感情なんてないはずだよね？
うるりが、全てを受け入れてくれるのなら……。

だから――私はもう「親友」だとかいう、そんな中途半端な関係じゃ我慢できないの！
もっともっと、うるりに近づきたい。
もっともっと、うるりのことを知りたい。
登下校のときは手をつないで、お昼はお互いに食べさせあって、お休みの日は「デート」に出かけて、そして……キスをするの。
たまに、クラスメイトの女子同士がいちゃついて、そういうことをしているのは見かける。
でも私は知っている、それが本気ではないということを。お遊びとしてやっていることを。
私のうるりへの想いは本物だから、そんなこと冗談でもできなかった。
彼女を想うがこそ、かえって距離が広がるもどかしさがあった。
だから、そう。
親友じゃなくって、恋人。
最近、もうそのことばかりで頭がいっぱいになって、まともでいられなくなっている私だった――。

部室は西向きに二枚の窓があって、グラウンドに面していた。
窓を開けていると、運動部の快活な声と、優しい風、そして夕方になると西日が入り込んでくる。
お互い読書をしているときは、あまり会話に興じることはない。
本を読んでいて、ここが面白かったとか、ここに誤植があったとか、笑いとか驚きとか新発見を共有するときだけ相手の名前を呼ぶのだ。
家が隣同士だから、登下校時とか、その気になればいつでも日常会話に興じることができるから……というのもあると思う。

活字から目を外してふと窓の外へと目をやると、その日は夕焼け空が真っ赤で、ひつじ雲が描く光と影のコントラストが幻想的だった。
「もう、夕方だね。そろそろ帰ろっか？」――そう告げようと、彼女に向き直って――わたしは息を呑んだ。
西日に受けて本へと目をやる幼なじみの姿が、かっこよすぎて、可愛すぎて、美しすぎて――私は一瞬に心を奪われてしまったんだ。

「ねぇ、うるり」

うつむき気味に、声を掛けた。
彼女は顔を上げて、「どしたの？　そろそろ帰る？」と言った。

私の中で、理性と感情が戦っていた。
感情は――全ての気持ちを吐き出して、スッキリして、お互いがもっと幸せになりたいという気持ち。
そして理性は――この恋心をずっと隠してきた理由なのだが――私が女の子で、彼女が女の子ということに付随する一切合切のしがらみ。

この国では――愚かなことに――同性同士の結婚を認めていない。理由は単純明快、無生産的だから。ゆえに、同性同士の恋人も白い目で見られる。

子供ができないから、同性同士の結婚を認めない！？

バカらしい！

別に子供なんていなくてもいいし、最近はｉＰＳ細胞というもので同性同士でも子供が作れるみたいじゃない！！　そんなの理由にならないよ！

とにかく、世界的にそういう風潮だから、そんな世界で生まれ育った人間は、女の子が女の子を好きになることを「悪い事」だと判断して、そしてそういう人たちに「レズ」というレッテルを貼る。

違うのに……。

私とうるりが思い描いている関係はもっと純粋で、決して悪い事じゃないのに……。

しかしそう自分に言い聞かせるも、こんな世界で生まれ育ってしまって毒されてきた私だから、それとなくこれが「イケナイコト」ということを察していて、それが私をがんじがらめにしていた。

でも――うるりは例外だよね。

うるりも私のこと大好きだよね？

うるりはどんなときでも、私の味方だよね？

頭の中で、様々な思考がぐるぐると回る。

告白しよう！　いいや、そんなのダメ。まだ親友って関係で我慢できる。ううん、もうダメ……我慢できない！

そして最終的には、ついに感情が理性に打ち勝ってしまった。

これまで抑え付けてきた想いは、理性の堤防が崩壊して、怒濤のように外へ外へとあふれ出てくる。

「ね、ねぇ……？　あのさ、えっとね、そのー……うるりは私のこと好き？」

立ち上がって、うつむいて、全身が熱い。顔も真っ赤だろう。その赤色は、夕焼けだけのせいじゃないはず――。

「どしたの、更紗。いきなり。そんなの決まってるじゃない。ボクは更紗のこと好きだよ？」

好き――。ホント？

嬉しい言葉を耳にして、私は顔を上げた。

彼女はいつものように、落ち着き払った表情をしていた。

「わ、私もうるりのこと大好きなのっ！　ねぇ、いま私たち、最高の親友だよね？　でもそれからもう一歩ステップアップしよう？　恋人同士になるの！　毎日、手をつないで登校して、ご飯は食べさせあって、休日には公園とか水族館に『デート』っていう特別な名前のお出かけをして、そしてそして……ときどきイチャイチャしたりして――」

想いの丈を吐き出す最中、私は気がついてしまった。

目の前に立ち尽くす幼なじみが驚いた顔をしたまま、凍り付いていたことに。

え、私――何かやらかしちゃったの！？

彼女の姿を目にして、私まで全身が凍り付く。

「あのさ――更紗」

うるりが口を開く。

「ボクたち、女の子同士だよね？」

運命とは残酷なものだ。

彼女から一番聞きたくなかった言葉が、狭い部室中に響いて、私の頭の中で何度も何度もこだました。

そんな――嘘でしょ！？

うるりだけは、そんなこと言わないって思っていたのに！！

「ねぇ、教えて！？　うるりは私のこと大好きなんでしょ！？　私もうるりのこと大好きなんだよ？　それなのに、女の子同士だからって理由で、恋人になれないなんておかしいよ！！　うるりは毒されてるんだよ、この世界に！」

激昂する私。

いったい私は――何をやっているんだろう。

こんなことが言いたいんじゃない。

ただ伝えたいのは――。

「ごめん……」

彼女はきびすを返すと、一目散に部室を出た。

取り残される私。ただ呆然と立ち尽くす。

「あは、あはははは……」

乾いた笑いしか出てこなかった。

大好きなうるりに裏切られて、わたしの中で何かがはじけて壊れたのだった。

何かに取り憑かれたかのように階段を上り、ひたすらに屋上を目

指していた。
もちろん――こんな世界からサヨナラするため。
だってそうだよね？
私とうるりが恋人同士になって、幸せになれない世界なんて生きていても仕方ないよね？
落下防止用の柵をよじ登って、屋上の先端へと立つ。
向かいのグラウンドでは、体操着を着た運動部の子たちが部活動に取り組んでいて、すぐ下のブロック舗装された通りには、制服姿でだべっている子たちがいた。
沈み行く西日が綺麗だった。
憎いほど……綺麗。
あの美しさに騙されて、私は全てを失ったのだから！

ためらうことなく、空へと飛び込む。
世界がぐるりと半回転して、重力に従って下へ――いや、上へ上へと昇っていく。

――きっと次は、幸せな世界にいけるよね？
――そこでは私とうるりが恋人同士で、毎日イチャイチャとしていられる。
――それを誰も咎めることのない、優しい世界。

そして自然落下のまま地面に頭をぶつけて、トマトのようにはぜて――

「――はぁっ！」

目が覚める。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

悪い夢だった。告白に失敗して飛び降り自殺するなんて――
体中から汗が噴き出して、パジャマもぐっしょりしてる。
うー、シャワーでも浴びよう……。
ピピピピ。ピピピピ。
目覚まし時計のアラームが鳴る。
ベッドから腕を伸ばして、騒がしい電子音を止める。

「あれっ？」

目覚まし時計は、デジタル表示で現在時刻のみならず、今日の日付までも確認できるタイプだった。
今日は――5月23日の月曜日？

「……ウソ、月曜日？」

何か、おかしいような……。
今日は5月27日の金曜日のはずだ。
月曜日は球技大会で、水曜日には英語の小テストがあった。
それは夢じゃない――体が覚えている、間違いのない現実。
なのにどういうわけだか、つじつまが合わないことに気づく。

「もしかして、夢……じゃない？」

2回目の5月23日の月曜日。
私――天川更紗の初めてのループ。
そして、うるりと幸せになるための闘いのはじまり。
もしくは平穏な日常のおわり。

完璧な世界　または　繰り返す日々

そんな風にして、私はループに巻き込まれて、５日間を繰り返すことになった。
しかしこれはチャンスなのだと、２回目の世界であらゆる物事が私の記憶通りに動いているのを見たときに、ふと思った。
ただ、再度告白するチャンスを手に入れただけでなく、私はこの時間線で、世界がどのように動くか知っている。
それは、ふと思いついた「パーフェクト大作戦」を実行する上で、この上なく都合がいいのだ。

要は、うるりの前で何事もカンペキに振る舞うのだ。優しくて、頼りになる人間を演じてみせる。
そしてそれは、世界を繰り返し、何が起きてどのような結果が生じるのか知っている私にとってはたやすいことだった。
２度目の世界――わたしは自室で午後９時を迎える。
すると意識が朦朧として視界が歪み、気がつけば自室のベッド・５月２３日の月曜日・朝７時を迎えていた。

朝、私の起こすべき行動はもうすでに決まっていた。
ブラウスとチェックのプリーツスカートに着替えてベランダへと出ると、意を決して塀を乗り越えて、向かいのベランダへと無事着地、そのまま開け放してあった窓から部屋へと入り込んだ。
うるりの部屋は、わたしの部屋の向かいにあって、小学生時代はよくお互いの部屋をこうして行き来したものだった。
中学生になった今ではそういうことはほとんどなくなったのだが、玄関が閉まっていて、かつ家にうるり以外誰もいない状態ではそうするよりほかなかった。

そう――あれは、人生における失態ワースト3に入る出来事だった。
２３日は日中球技大会が行われていたのだが、彼女はお昼の前に唐突に倒れてしまったのだ。
原因はすでに分かっている。
うるりの両親が、日曜から旅行に出かけていて、戻ってくるのが月曜日の夜頃。
彼女はちょっと寝ぼすけなところがあって、普段はうるりの家の前で８時１０分に落ち合う約束なのだが、この日はその時間になっても現れなかった。
もしやと思い、呼び鈴を連打して、寝ぼけまなこをこすったパジャマ姿の彼女が出て来て、全てを理解したのだった。
普段はうるりのお母さんが起こしてくれて、朝ご飯も用意してくれていたのだけれど、それがなくなり、ゆえに月曜日、ろくに朝ご飯も食べられず、走って通学してなんとか遅刻を回避したのだった。
もちろん「朝ご飯は一日の元気の源なのに大丈夫？」って何度も何度も念押しした。
うるりは「大丈夫」って言っていたけど――それは強がりだったんだ。
バレーボールの試合の途中で倒れ、保健室に運ばれ、目が覚めて開口一番、「ゴメン、親がいないこと言ったら心配すると思ったから」って言っていた。

あのときの私は最悪だった。
私が着いていながら、こんなことにも気づかなかったなんて！
きっとうるりも失望していたんだろうな。
もしそのことを事前に知って、一緒に朝ご飯を食べられていたなら……あのときの告白の結果は、違うものになっていた……かもしれない。

「おはよう、うるり。朝だよ、起きてっ！」

布団を被ってすやすやと寝息を立てる彼女の体を軽く揺する。
あー……なんだかこうしているだけですごい幸せを感じられる。
だって、ずっとあこがれだった、一つ屋根の下で生活を送っているような感じなんだもの。
そうなんだ。こんな毎日を求めて、いま私は頑張っているんだ。
そう思うと、この世界の繰り返しも俄然やる気が湧いてくる。

「……ん、んん、母さん……？」

まだ寝ぼけてるみたい。ふふっ、そんなところが可愛い。

「違うよ、私だよ。ほら、早く起きないと遅刻しちゃうよ」

「ほぇ？　えっ、更紗……？」

寝ぼけ眼を擦って、ようやく目を覚ましたかと思うと、その瞬間、一気に顔を紅潮させる。そりゃ、無防備なところを見られたら誰だって恥ずかしいよね。

「ど、どうしてここにいるの？」

「決まってるでしょ。今日、うるりの家、誰もいないんでしょ？
だから一緒に朝ご飯をって思って」

「ボク、そのこと言ったっけ？」

言ってないよ――まだ、この世界では。

でも前の世界で、そのことを知ったから。
ゴメンね、世界で一番大好きなはずなのに、気づいてあげられなくって。

「ふふっ。だって私たち親友でしょ？　うるりのことなんて、全部分かっちゃうよ」

罪滅ぼしをするつもりで、私は満面の笑みで言ってみせた。

うるりが寝癖を直したり、制服に着替えている間に、私はキッチンを借りて朝食の準備をする。
冷蔵庫の中には……あったあった、厚切りベーコン。それに卵。
これでうるりの大好きな厚切りベーコンエッグを作ってあげられる。
あとはトーストを焼いて、ミルクを入れて、野菜室の野菜で簡単にサラダを作ればいいかな？
そんな感じで朝食を二人分テーブルの上に並べたところで、うるりがキッチンにやってくる。

「ナイスタイミング！　さっそく朝ご飯にしよう！」

「……そうだね。それにしても、ありがと」

「何言ってるの。幼なじみだもん、これくらい当然だよ」

当然のことをできなかった、過去の自分を恨みながら、でもそれを表には出さずに明るく言う。

「今日は球技大会なんだよ？　しっかりとお腹に入れないと、倒れちゃうかもしれないし」

私たちはテーブルに向かい合って座り、「いただきます」をしてから、朝食に手をつける。
うるりが真っ先に手を出したのは、もちろんベーコンエッグだった。
フォークを刺して、皿をちょっと持ち上げてがっつく。
……あまり女の子らしい食べ方じゃないけど、でもここはお外じゃないから。私とうるりの二人だけの空間。お互いに心を許しているから、食べ方とかはあまり気にしない。

そういえば、うるりが自分のことをボクって呼び始めたのは、私たちが友達同士になってからだったと思う。
その理由は直接聞いたことはなかったけれど、いじめられていた私に救いの手をさしのべる王子様のように振る舞いたかったのでは？
だからあえて男の子みたいな一人称を使って――その癖が抜けず、今も「ボク」と自称している……。

もし告白がうまくいって恋人同士になれたら、将来はどうなるんだろう。
きっと役割分担とかするんだと思う。
たとえばうるりが物書きになったとして、私はそれを影ながら支える女房役。お料理とか、お掃除とか、そういった身の回りのことをしてあげる……といった未来像がイメージしやすい。
えへへ、そう。その未来は、今の延長線上にあって――

「更紗？　大丈夫？　なんかよだれ出てるよ？」

「え、わ、ご、ごめん……」

「ご飯を目の前にして、それを食べずによだれを垂らすなんて……更紗ったらおかしい」

妄想に耽っていて、ついつい周りの状況を忘れてしまう私をうるりはクスクスと笑う。
まったくもう、こんなだらしないところを見せちゃダメ！
この世界は、何もが予測通りに行く「完璧な世界」なんだから！
そしてうるりにかっこいいところを見せて――今度こそ告白を成功させるんだから！！

＊

学校に到着して、私たちはさっそく体操着に着替える。
球技大会の今日は、通常の授業の代わりに、女子はグラウンドでバレーボールをするか、体育館でバスケットボールをすることになっていた。
私とうるりはバレーボールだったので、グラウンドでの全校集会の後もそこに残って、試合が始まるのを待っていた。
以前の世界では、うるりは空腹から突然倒れてしまい、保健室送りになったけれども、この世界ではそんな心配は無用だろう。

３試合目になって、私たち３－２の順番がやってくる。
以前の世界では、私たちのクラスは体調不良者が出たり、うまく連携を取れなくて敗北を喫した。
それに……「背が高い」それだけの理由で、エース扱いされていた私が、大した活躍できなかったのも敗因だと思っている。
球技大会のバレーボールは、６人のローテーション制で、私たちのクラスの場合、全８人が代わる代わる時計回りにポジションや出場者を替えなくてはいけないというルールだった。
ちなみに２５点先に取った方が勝ちで、デュースはなしだった。

６人が背の高いネットを挟んで向かい合う。

私の初期位置はフロントレフトで、言ってみればスパイクを放つ花形ポジションだった。ちなみにうるりはその後ろ。
以前は活躍できなかった私。
でも私、文芸部に所属しているけれども、運動神経自体はそこまで悪くない。
ただ……この内気な性格ゆえに、どうも積極的に出ることができなくって、それで……活躍できなかった。
けれども、この新しい世界ならば。
最初は相手がどういう風に動くかは分かっているし、何よりうるりにかっこいいところを見せなくちゃいけないっていう自負があるから！
私は一球一球に全力すると闘志に燃えていた。

そして私は以前の世界ではできなかった、ブロックやスパイクを連発して、大活躍することができた。
うるりも、子供の頃からすばしっこかったけれども、その敏捷性は今になっても衰えていないみたいで、ファインプレーを連発。
全力で目の前の試合に打ち込む姿が、他のメンバーの子にも伝わったみたいで、結果、終わってみれば２５－１６で勝利していた。
勝利したことは純粋に嬉しかった。
でもそれ以上に幸せだったのが、うるりが「すごいね、今日の更紗かっこいい」って言ってくれたこと。
瞬間、胸が熱くなって、作戦が成功しつつあることに、この上ない喜びを感じたんだ。
そのまま破竹の勢いで３－２は勝利し続け、結果バレーボールで優勝を勝ち取ることができた。
以前の世界にはなかった素敵な思い出を作り、またかっこいいところも見せることができて、この調子なら、うるりも私に振り向いてくれる――そう確信していた。

告白は、木曜日の夕方、また図書準備室でやろうと決めていた。
球技大会は終わったけれども、まだまだ彼女にいいところを見せるチャンスはあった。
たとえば、水曜日には英語の小テストがあって、わりかし難易度の高い問題だったけれども、私は問題と答えをあらかじめ知っていたからもちろん満点だった。
それにどんな問題が出てくるか分かっていたから、あらかじめうるりにそれとなくアドバイスをすることもできた。
体育の授業でクラスの子が怪我をしたときは、周りの子があたふたとしている中、真っ先に駆けつけて保健室へと運んであげた。
そんな風にして私は――可能な限り完璧な日常を送って、うるりにアピールをしたんだ。
すぐ側にいる幼なじみは、優しくて、気配りができて、勉強も運動もできる、完璧な人間だって。

木曜日の放課後、私たちは図書準備室で各々読書に耽る。
うるりは、以前の世界で読んでいた小説をまた読んでいた。
私はパイプ椅子に腰掛けて、本を開いてみるものの、紙の上に印字された活字がまったく頭の中に入ってこなかった。まるで文字が紙面を泳いでいるようだった。
仕方がないので、瞳を閉じて、思案に耽ることにする。

告白は……いつしようか？
具体的な時間はまだ決めていなかった。
また、西日が教室に注ぎ込む頃がいいかな？
夕日を浴びた顔って、普段よりもだいぶ美人に見える。
以前の世界では、うるりがいっそう美しく見えて、それで私を告白に導いたけれども、逆もまた然り。
私だって、うるりの瞳には夕日のおかげで美しく映って、そんなロマンチックな雰囲気に呑まれてしまうかもしれない。

うーん、でもそれで前回は失敗したんだよね。……悩ましい。

それから――なんて声を掛けようか？

以前の世界では、「うるりは私のこと好き？」だった。

でもこれは、「友人として好き？」と勘違いされて、結果撃沈したんだ。

私がただ伝えたいのは、いかに私がうるりを想っているか。

この気持ちを表現するのに、言葉なんていらないのかもしれない――。

ふと思いついた妙案に、感情を抑えきれなくなって立ち上がると、うるりは顔を上げて、「どうしたの、トイレ？」なんて言ってきた。

私はまっすぐにうるりを見下ろす。

長いまつげや、黒曜石みたいな見ていると吸い込まれそうな綺麗な瞳、そして桜色のぷるぷるとした唇を見ていると、なぜだかそれだけで熱い感情が体を駆け巡って、涙として瞳からあふれ出てきた。

「ど、どうしたの、更紗？　なんで泣いて――」

迂回して、長机を挟んで向かいにいた彼女の元へと歩み寄る。

涙が止めどなく溢れて、真下にあったうるりのスカートを湿らせていく。

本当は、告白も「カンペキ」を演じて、優等生的な言葉でするつもりだった。

でもこうして彼女を前にすると、言葉だと私の本心が彼女にうまく伝わらないんじゃないかって怖くなって――

私は膝をついて、両手を彼女の肩の上に置くと、薄桃色の唇を奪っていた。

暖かくて、柔らかくって……夢にまで見たキス。

本当は、恋人同士になってからこういうことはするものだっていつも言い聞かせてきたけれど、いかに本気かということを、行動で彼女に知らしめたかった。
うるりは、驚きのあまり瞳を大きく見開いていた。
私はいっそう彼女を強く求めたくなって、唇をより強く押しつける。
うるりは全身をびくりと震わせると、背後に重心を移動させた。するとパイプ椅子は私たち二人の体重を支えきれずに背後に倒れて、私がうるりを押し倒すような形になった。
「……ねぇ、うるり。好きなのっ。分かるでしょ、私のこの気持ち……！」
我慢できずに言葉を紡ぐ。
もう一度、彼女の唇を奪おうとして、
「分かるよ。更紗は、ボクの最高の友達。更紗がボクをどう想っているかなんて……」
「うるり……！」
私の想いが、彼女へと届いた。
努力が実って、ついに恋人同士になれる……そう確信した瞬間、
「でも、ゴメンっ。ボクは更紗とは恋人同士にはなれない」
「え――」
時間が凍り付く。
私を押しのけるようにして立ち上がったうるりは、双眸に涙を浮

かべていた。

「ゴメン……」

それだけつぶやいて、一目散に教室を出て行った。

「どうして……なの？」

一人残された狭い空間で、私は絶望にうちひしがれる。

何が悪かったのか……私には、何も分からない。

いいところいっぱい見せたし、それにうるりは言ってくれたんだもの、「最高の友達。更紗がボクをどう想っているかなんて……」って！

うるりが、私を嫌っているとか、その線はない。

やっぱりこの性別がいけないのだろうか。

同じ種を2つに分かつ、男と女という性別が――。

＊

それから私は何度も何度も世界を繰り返した。

様々な可能性に掛けて、いろいろな自分を演じてみせた。

告白の時間や場所も変えてみた。

夕方の部室だけでなく、朝のうるりの部屋、お昼休み校舎裏で、夜、私の部屋で――などなど。

吊り橋効果――人は生理的に興奮しているときに、恋愛感情を受け入れやすい――というものがあると知ったときは、屋上の柵を乗り越えたところで告白をしたこともあった。

他、いくつかの珍説を建てて、それに従って5日間を送ったこともあった。

うるり世話焼き説――実はうるりは（朝が弱くて、ご飯も作れな

いけど）世話焼き体質で、完璧な子よりもだらしない子を好いてくれる。
うるり許婚説（いいなずけ）――実はうるりには、私の知らない将来を誓い合った相手がいて、それで拒絶されている。
うるり悲劇のヒロイン説――実はうるりの余命はあとわずかで、恋人になってもすぐに死別してしまうのが悲しくて、恋愛関係になるのを拒んでいる。
もちろんこの珍説はやっぱり珍説に終わって――それで、私はなすすべがついになくなった。

うるりに告白をして失敗して、そのたびに世界をやり直してきた私。
でもこんな重荷が、若干１５歳の私に耐えきれるはずもなかったんだ。
世界をやり直す代償として、心が闇に蝕まれていくのが分かる。

そして３４度目の世界を終えたとき、私の心は完全に得体の知れない何かに覆われていた。

うるりはどうしても私に振り向いてくれない。
どうして？
私は悪くないよね？　最善を尽くしたんだもの。
うるりが悪いの？　そんなことない、彼女はいつだって悪くない。
じゃあ――

「この世界が悪いんだね」

うるりはいつも言うんだ。「女の子同士だよね」って。
そういうことなのかな。
どんなに側に素敵な人がいたとしても、同じ性別というそれだけ

の理由で選択肢から除外されてしまう。
うるりは……可哀想な人間なのかもしれない。
このおかしな世界に毒された、被害者なのかもしれない。

それならば――
解放してあげるんだ。
彼女を、このおかしな世界から。

箍(たが)が外れた私の心は、募らせてきた想いと死の繰り返し、そして自らの欲望で混沌として、もう自制が効かなくなっていた。

百合心中

戦前、女学校というものが制度化され、そこに通う１０代の女学生達は、男のいない環境で、勉学に励んだり、家事・裁縫といった花嫁修業的なことも学んでいたという。

ところで、当時女学校の中で、「エス」という関係が流行していたという。

簡単に言えば、後輩の女の子が先輩の女の子にあこがれを抱くことで発生する、お互いに成長を促すような、精神的なつながりのことだ。（そういえば少し前、そんな設定のライトノベルがあったような気がする）

大半のエスは、学校を卒業すれば自然解消されるようなものだったらしい。

というのも、女学校の目的は、良妻賢母を育成することであり、女学校に通うような良家のお嬢様ともなると、大抵結婚相手が親により幼い頃から決められていて、卒業後もそんな関係にこだわる必要などないからである。

エスの関係は、男のいない閉鎖空間における、代替的な関係。

そしてこれは当事者の中でほほえましい思い出となって、心の箱の中にしまわれ続ける……。

しかし――本気で、相手のことを想い、この関係を継続しようと願う女の子も例外的にいたらしい。

だが当時は、結婚相手なんて親の意向で勝手に決められるようなご時世だから、たとえ異性恋愛だとしてもそれは認められない。まして女同士なんて――。

――好きでもない男と一緒に過ごすのなんてイヤだ！

――あの子と永遠に一緒にいたい！

そう願う少女たちは、時間を止めて今の関係を永遠に続けることを選んだ。
そう……心中を起こし、肉体から精神を解放し、この恋愛が認められない世界を離れていったという。

昔、大正から昭和の女学校について調べることがあって、そのことを知識として持っていた。
相手を巻き込んで死ぬなんて……と当時は思ったけれども、今の私なら彼女たちに共感できるような気がする。

＊

次の世界に移動し、以前の世界と同様にうるりの部屋を訪れて、一緒に朝ご飯を食べる。
球技大会も無事優勝し、大活躍した私は帰りのホームルームでクラスメイトからの暖かい拍手を受けていた。
放課後、クラスメイトたちは各々教室を出て行って、残されたのは私とうるりの二人だけになった。
私は窓の外から見える景色を呆然と眺めていた。今日は運動部の活動もお休みで、校庭にはほとんど人はいなかった。

「どしたの、ぼんやりして。もしかして、燃え尽きちゃった？　今日の更紗、すごかったからねー」

私の隣へと並んで立つうるり。

「……ちょっと考え事してるの」

「考え事？　何か悩みでもあるの？」

「うん……」

一呼吸置いてから、隣の彼女へと顔を向けた。

「うるりは、私のことどう思ってる？」

「えっ、どうしたのいきなり。ボクは、更紗のこと親友だって思ってるけど」

「親友……か。じゃあさ、それ以上の関係になりたいって思ったことはある？」

「それ以上って……」

「恋人」

うるりをまっすぐと見下ろす。

「……恋人って。冗談だよね。なんだか今日の更紗、ちょっと怖いよ？」

「冗談じゃないよ！」

大声で叫ぶと、うるりは肩をびくんと跳ねさせた。

「私は親友っていう関係じゃ我慢できない。うるりのことを世界一想っているから、恋人同士になって付き合いたいの！　手をつないで登校したり、デートしたり、キスしたり……」

今度は言葉で、自分の純粋な気持ちを吐露する。

しかしうるりは暗い表情をしてうつむいたまま、

「……ゴメン。ボクは、更紗とそういう関係になれない」

そう言って、教室を飛び出していってしまった。

告白して拒絶される日常。

私はもう、この結果に絶望するようなことはなかった。

だってうるりは悪くないんだもの。世界が悪いんだから。

この告白は、後腐れがないようにしておくための布石。

後は予定通りに、私がうるりを優しい世界へと導いてやればいい――。

翌朝は一人で登校した。いつもは決まった時刻にうるりの家の前で待ち合わせをする約束だけれども、さすがにそうする勇気はなかった。そしてそれはうるりも同じだろう。

そうして一人で教室に入った瞬間――。

ホームルーム前の教室はいつもとてもにぎやかなのに、今朝は驚くほど静かだった。

ちらほら教室の隅で、クスクスと笑い声を上げる子たちもいる。

露骨に、私を指差してくる子もいる。

そして教室前面の黒板を見て、私は全てを察した。

昨日の放課後までは、「3―2　バレーボール　優勝おめでとう！」と色とりどりのチョークで書かれていたのが、今朝は「天川更紗はレズ女」という心ない文章に変わっていた。その周りに、小さな文字で「死ね」「消えろ」とか「ガチ百合」「うるりが可哀想」とか書かれている。

それを見て、私はもはや「辛い」とか「悲しい」といった、正常な感情が湧いてこなかった。

ただ、この世界に対する呆れしか出てこなかった。

昨日の放課後、私が告白した瞬間、おそらく廊下に誰かがいて、こっそりと聞き耳を立てていたんだ。
それがたまたまクラスの中心人物で、もしくはメールとかで中心人物まで伝播して、こういう状況になった。
教室の中で、露骨にニヤニヤしている連中がいた。
二人の取り巻きを囲って、脚を組み偉そうに机に座る女。
私の予想では、彼女――興味がないので、苗字すら分からない――がこのくだらない取り組みの主犯格。
やっぱり……そうなんだよね。
この世界は腐っているんだ。
何も悪いことしていないのに、一方的に糾弾されるんだ。
ちなみに私の机の上には、白い百合の花が一輪咲いていた。
どうもご丁寧に。わざわざこのために買ったのかな？
百合の花は、女の子同士の恋愛を指す隠語であることを差し引いても、好きな花だった。白くて綺麗で、ラッパのような形をした花弁の形が美しいと思っていたから。

そうだ、うるりは――。
教室中を見回すと、彼女がまだ登校していない事に気づく。
もうそろそろ朝のホームルームが始まろうとしているのに、……
もしかして今日はお休み？

不意に、腕を何かに掴まれる感覚。
私の目の前で、主犯格と思しき例の名前も知らない女が、にらみをきかせていた。
きっと彼女は、どういうわけか私を恨んでいて、今回の「いたずら」を実行して、泣きじゃくって黒板の文字を必死に消したりということを望んでいたに違いない。でもそんな予定通りに私が動かなかったことにイライラきているのだろう。

「あんたさぁ……」

「うるさい。邪魔」

こんな女どうでもいい。

私は手を振り払うと、きびすを返して、教室を飛び出た。

廊下を駆けて、来た道を戻る。

例の計画は、金曜日に実行予定だった。

この世界の終わりに、私とうるりが華々しく散るつもりだった。

でもこんな残酷で最低な世界に、彼女をこれ以上生かしてはおけない。

うるり、待っててね。

いま、楽にしてあげるからね……！

＊

うるりの両親は共働きで、もし彼女がサボりなどではなく、体調不良で学校を休んでいたのならば、家には彼女しかいないはずだった。

インターホンを鳴らして彼女を玄関に呼ぶことも考えたが、玄関で面と向かうのはとても気まずかった。

だから二階の自室からベランダを通って、彼女の部屋に侵入することに決めた。

窓には鍵が掛かっていなかったので、ノックなどもせずそのまま部屋に入る。

するとベッドで横になっているうるりの姿が目に入った。

顔にはほんのりと赤みが差していて、目頭はしっとりと濡れていた。

窓を開ける音で彼女は瞳を開いて、私の存在に気がついたようだった。

「さ、更紗？　学校はどうしたの？」

横たわったまま、うるりは問いかけた。

「それはこっちのセリフだよ。学校にいなかったんだから。もしかして家にいるんじゃないかって思って」

ゆっくりとゆっくりと、彼女が休むベッドへと近づいて行く。

そのたびに心臓が跳ね上がる思いだった。

肩に掛けたスクールバッグが、まるで鉛でも入っているかのようにずしりと重く感じる。

「……ゴメン。ちょっと体調が悪くって。連絡もできなくって」

「連絡……できなかったじゃなくて、連絡したくなかったんでしょ？」

昨日、あんなことがあったから、気まずくって電話でもメールでも連絡しづらかったんだ。

私も彼女と同じだから。

これまでずっと親友としてやってきて、あの告白で関係が壊れてしまって、自ら死を選ぶほどの思いだったから。

掛け布団を剥がすと、パジャマ姿の無防備な姿が露わになる。

体調不良のせいもあってか、今日のうるりはとても弱々しかった。

私は子供を看病する母親のような優しい表情を作って、ベッドに腰掛けた。

「熱、出てるの？」

「……うん。３８度弱かな。ちょっと意識もぼんやりしてて、今日はお休みの気分」

顔を紅くしながら、うるりは微笑を浮かべて答えた。

体調が優れない原因は、きっと私だ。私の告白なのだろう。

うるりは優しい子だから、告白を断ったことを真剣に悩んでくれて、それで風邪をひいてしまったに違いない。もしかすると夜も寝られずに、一晩中悩みに悩んでくれたかもしれない。

「あのさ……昨日のことだけど」

うるりが小声で言う。

「うん」

「言葉足らずだったかもしれない。ボク、更紗のことは好きだよ？……その、恋人同士にはなれないけど、これまで通り友達同士としてやっていけたらいいなって思ってるんだ」

うるりは私を嫌ってなんかいない。むしろ好いてくれている。

それは純粋に嬉しいけれども――でも同時にもどかしくもある。

こんなに近くにいるのに、……決して私のものにはなってくれないんだから！！

「……友達っていう関係じゃ、もう満足できないの」

上半身を素早く半回転させ、ベッドの上に飛び乗ると、そのまま腰の辺りに馬乗りになる。

左肩のスクールバッグに手を突っ込んで、この瞬間のために自宅

のキッチンから拝借した刃渡り１８ｃｍの包丁を手にして、うるりの頭上に掲げた。
　空いた左手で彼女の右腕を押さえつけると、うるりは自身の置かれた状態をようやく判断できたのか、左腕を伸ばして、包丁を手にした私の右手を押さえて、全身をじたばたと動かし始めた。

「更紗！？　どうしたの、いきなりこんなことして！？　怖いよ、その包丁……。早くしまってよ！！」

「ダメだよ、うるり。これはね、私たちを新しい世界へと導く、幸せのチケットなんだよ？」

「な、何言ってるの？」

「私、うるりのことが好きで好きで仕方ないの。それでね……何を言っているんだろうって思われるかもしれないけど、うるりへの告白と死を繰り返してきて、ようやく理解したんだ。うるりも私も悪くない。世界が悪いんだって。うるりが私と恋人同士になれないのって、『女の子同士だから』なんだよね？　そしてその思想に毒された人たちが、それをバカにして拒絶するからなんだよね？　今朝、学校に行ったらね、教室の黒板には、うるりを好きでいる私を誹謗中傷する書き込みでいっぱいだった。きっと昨日の放課後、誰かがこっそりと私の告白を聞いていたんだと思う。前々から、この世界からうるりを解放してあげなければいけないって思っていたけど、その瞬間私の頭の中で何かがはじけて、一刻も早く世界から飛び立たなければいけないんだって悟った。だから――お願い、一緒に死のう。そして、私たちの関係を誰も咎めることのない優しい世界へと飛び立とう？」

　それだけ言って、邪魔なうるりの手を簡単に引きはがす。まるで

赤子の腕をひねるが如くだった。極限状態に陥っているから、バカみたいな力が出ているのだと思う。
そして私は彼女の喉元に鋭い刃を勢いよく突き刺した。
彼女の泣き叫ぶ声。
激しく私の体を叩く拳。
そんなものはもう気にもならなかった。
包丁を引き抜くと、ぱっくりと開いた傷口から噴水のように温かい血飛沫が吹き出て、彼女の体もパジャマもベッドも制服姿の私も、傍らのクマのぬいぐるみも、全てを真っ赤に染めた。
必死にもがいていた彼女の動きもやがて停止する。

私は抜け殻となった彼女の唇を奪う。
涙がどっとあふれ出てきて、血だまりに一滴、また一滴とこぼれ落ちていく。
どうして私たちは、こんなすれ違ってしまうんだろう。
ただ普通の女の子として、普通に仲良くなって、普通に恋して、普通に日常を送りたかったのに。
でも仕方ないんだ。
ここはそういう世界だから。
これは私の、呪われた世界から脱出するための頑張り物語なんだから。

自身の喉元へと刃先を突き付けると、ためらうことなく突き刺して、うるりに重なるようにくずおれた。
これで……いいんだ。
これで私たちは救われる。
悲しみのない、優しい世界へ――！

二重螺旋の世界

ボク――二水（にすい）うるりは、死亡しても過去の時点に戻る不思議な現象に巻き込まれている。

いわゆる「ループ」というもの。記憶を保持したまま、一定の時間線をやり直すことができる。

このループが始まったのは、中学2年生の秋――ボクが、文芸部の部室で更紗（さらさ）に告白をしてからだった。

天川（あまかわ）更紗。15歳。5月11日の牡牛座。

身長は173cm。かなり高い。体重は……実は知らない。血液型はA型。

つややかな黒い髪を腰まで伸ばしていて、大きなリボンで後ろ髪を束ねている。

内気な性格だけれども、そんなところが可愛い幼なじみだった。

ボクと更紗が親しくなったのは、小学4年生のことだった。

家は隣同士で同じクラスだったけれども、ボクには他に仲良くしている子がいて、それでボクたちの関係はあまり進展していなかった。たまたま家が隣同士で、たまたまクラスが同じ程度の仲。必要以上に親しくせず、数ある友人のうちの一人という感じだった。

しかし、背が高いことを理由に、更紗がクラスの子に嫌がらせを受けていたことを、ある日知った。

当時から、更紗の身長は平均よりだいぶ高くて、頭一つくらい出ていた。

でも内気な性格ゆえ、身長に関するイヤな言葉を言われても、それに言い返したりすることはできずに、ただ涙を流して我慢することしかできなかったみたいだった。

いわば一種のサンドバッグ状態で、そんな更紗は子供たちの格好の餌食になっていた。

そのことを知って、ボクは嫌がらせの主犯格――割とお金持ちのお嬢様だったと思う――に喧嘩を売って、最終的には取っ組み合いになってしまったけれども、更紗を助け出すことができた。

その行動は「いじめはいけない」とか、そういった純粋な正義感からではなかった。

ボクは、更紗ともっと親しくなりたかったんだと思う。

彼女は長い髪の毛や可愛いヘアアクセサリーやフリルのついたワンピースがすごく似合っていて、とても女の子らしかった。実を言えば、当時は今と比べるとすこぶるやんちゃだったボクは、彼女にあこがれのようなものを抱いていたのだった。

悪く言えば、彼女の弱みにつけ込んで、ボクは更紗に近づいた……というわけだ。

まあ動機はさておいて、このボクの取り組みは成功を収め、思惑通りにことが進んでいった。親友になって、ボクたちはお互いの家や公園で遊んだりするような仲になった。

小学校を卒業して、地元の中学校に入学した。

ただ1年目は、ボクたちは別々のクラスになってしまって、更紗が近くにいなくなることで胸が苦しくなることに気がついた。

これまでは授業中、隣の席にいる更紗が何をしているかなんてすぐ分かったけれども、あの時は、ボクたちを隔てる一枚の壁のせいで、彼女が授業中何をしているのか想像に耽ることが多くなった。

部活動は、文芸部を選んだ。

……といっても、文芸部は部員がゼロでほぼ廃部状態だったところを、顧問である司書さんに頼み込んで、なんとか図書準備室を借りているという状態だったけれども。

文芸部の活動は、図書室の本を読んだり、小説を書いてみたりと

いう具合だった。
物語を紡ぐことは、幼い頃から好きだった。
クマのぬいぐるみを見て、主人公のクマが森の中を冒険するお話を想像したり、魔法使いが出てくるゲームをプレイした後は、魔法使いが困っている人を助ける物語を考えたりという感じで。
人によっては、これを黒歴史というかもしれない。
でもボクにとってはある種生きがいの一つであって、でもこれまで頭の中の雑然とした物語を一つの形にしたことがなかったので、文芸部員として、小説という形で物語を紡ぎたかったのだ。
更紗と二人きりで過ごす部活動は至福のひとときだった。
狭い教室。積まれたダンボール。古書の匂い。
読んだ小説の感想を共有したり、書いた文章を読んでもらって喜んでもらったり。
秘密基地のようなその空間で彼女と一緒に過ごしていると、クラスが別々ということもあって、心が満たされていって――これが恋なんだってボクは気づいていた。

心という器に満たされていく、不思議な気持ち。
器には限りがあるから、募る想いはどんどんあふれ出ていって、心が爆発しそうになる。
この気持ち――更紗に正直に伝えたい。
しかし、なかなか踏ん切りがつかなかったのは、やっぱり「世間体」というものがあったからだ。
「女の子同士はいけないこと」――どういうわけだか本能的に、それが悪いことだって私は知っていた。
クラスの女の子同士で、手をつないだり、あまつさえキスをしたりということは日常茶飯事なのだけれど、それとは違う、一線を越えてしまうことなんだって分かっていた。
更紗はどう思っているんだろう。
周りの子たちと同じで、「女の子同士」を悪いこととみているの

か、それとも――。
いや――更紗なら大丈夫。
きっとそんな偏見を持ったりしないはずだ。
そう言い聞かせるものの、ボクは二の足を踏んだままでいた。

この想いを日に日に募らせながら、ついに2年生の秋、文芸部の部室で、ボクは行動へと移すことにした。
と言っても、直接告白するほど、ボクには勇気が足りなかった。
ワンクッション置いて、それから秘めてきた想いを告げる手はずだった。

「更紗、新作書いてみたんだけど、読んでくれない？」

「この間からずっと書いてきた奴？」

「そう」

「確か、恋愛ものって言ってたっけ？」

「うん。こういうの初めてだから、感想を聞かせて欲しい」

「あはは、いつもファンタジーか童話系だものね。うるりは」

コピー用紙に印刷した２０ページほどの新作を手渡す。
それは――ボクの想いの結晶であり、更紗の気持ちを確認する踏み絵のようなものでもあった。
要は、女の子が女の子に恋する小説だった。
主人公の女の子は、窓から空を見るのが好きな一風変わった少女。
そんな彼女の友人は、派手目な女の子で、星を見るのが好きな子。
二人は天文学部に所属していて、日々青空か夜空かどっちが優れ

ているかで喧嘩をするような仲だけど、次第にお互いひかれていって……という感じの物語だ。

物語を読み進める更紗を注視する。

読み始めは、いつも浮かべているおだやかな笑顔だった。

一枚一枚ページをめくる度に、ボクは心臓が跳ね上がりそうになる。

そして物語が後半に進んでいって――実は「星の少女」がかつて「空の少女」に助けてもらったことがあって、それがきっかけで恋心を抱いていることが判明すると、更紗は少しだけ頬を紅くした。

更紗、ドキドキしてくれているのかな？

女の子同士の恋愛でひいてたりしないかな？

冷や汗が出て来て、全身が薄ら寒くなってくる。

更紗は無言のまま、ページをめくっていく。

固唾を呑んで見守っていると、ついに最終ページに到達したようだ。

最後は、二人の気持ちが通じ合ってキスをして……というハッピーエンド。

更紗は原稿を机の上に置く。顔はかなり紅くなっていた。

「女の子同士の恋愛だったんだね……」

小声で、まず更紗はそう口にした。

なんだかすごく気まずい雰囲気だ……。

「う、うんっ。ど、どうだったかな？　やっぱりこういうの……気持ち悪いかな？」

弱気になってしまい、ボクは心にもないことを口にしてしまう。

すると更紗は突然立ち上がる。パイプ椅子と床がこすれる音が響

いて、ボクはビックリする。

「そんなことないよ！　私は……女の子同士の恋愛って、なんだか幻想的でロマンチックで……そういうのもありだと思うの。だからうるりの小説読んでて、すごいドキドキしちゃった」

「……ホント？」

絞り出した声は、今にも消えてしまいそうな小声だった。
まるで泣きじゃくった子供が、親に懇願する時のような感じ。

「ホントだよ。うるりに嘘つくはずがないじゃない！！」

その言葉を聞いた瞬間、ボクの瞳から涙がこぼれ落ちていた。
やっぱり、思った通りだ。
更紗は女の子同士とか――そういうこと、気にしないんだ。

「うっ、うっ……」

あふれ出る涙を抑えることができない。
嬉しすぎたから。

「ど、どうしたの、うるり！？　いきなり、ボロボロと泣き出して！？」

でもまだ何も始まっていない。
ボクの正直な気持ちを更紗に伝えないと！
そのための小説だったんだから！

「更紗……ボクね、更紗のことが好きなんだ。ボクと付き合って欲

しい……。更紗を想うだけで、どんどん胸が苦しくなってきて、我慢できなくなってきたんだ。でも……女の子同士だから――」

「もしかして、それでこの小説を……？」

「うん。確かめたかったんだ」

泣きじゃくりながらも、ボクはまっすぐに更紗に正直な想いを伝えた。

対面した彼女はしばし硬直して、ポッとうつむき気味に顔を赤らめた。

「嬉しい……」

「え――」

「嬉しいの。私もうるりのこと、ずっと想ってきたから」

「更紗……」

ホント――夢じゃない？

ボクと更紗が、両想いだったなんて――。

「私も怖かった。もしかすると、『女の子同士だから』っていう理由で、拒絶されるんじゃないかって。だからずっとうるりのこと想ってきたけど、正直に告白できなかった」

「うん……」

ボクは更紗を力強く抱きしめた。

更紗も力強くボクを抱きしめてくれる。
「女の子同士」っていう壁は、ボクたちが見ていた単なる幻想だった。
子供の頃に想像していた幽霊みたいに、怖がっていたけれども、実は存在しないものだった。
本当は、隔てるものなんてなくって、こんなにも近くにボクたちはいたんだ。

こうして、ボクたちは想いを告げ合って、恋人同士になれた。

＊

幸せの絶頂とはいまのような状態を言うんだろう。
ボクたちはお互いの気持ちを確認し合えて、それから自ずとスキンシップが増えていった。
手をつないだり、一緒にご飯を食べさせあったり……クラスメイトの他の女の子達がするように、ボクたちもそうするようになった。
ただ、もちろん二人のこの関係は秘密だった。
周囲の彼女たちは、「友情を深める」という名目でいちゃついているけれども、恋愛対象はあくまで男なのだ。
ボクたちの関係が露呈すると、そのことで何か良くないことが起こるかもしれない……そう考えていた。

そんな風にして恋人同士になって、ボクたちは最初の休日を迎えた。
前日、部室で、更紗と「どこに行こうか」という話になり、家から歩いて15分ほどの距離にある広い公園でデートをすることになった。
ショッピングや、お互いの家に行って遊ぶという選択肢もあったけれども、それは付き合う以前からやっているから、恋人同士とし

ての初めてのデートは何か特別なものが良かった。
公園でのんびりして、更紗の用意した食事を食べたりといったことは、親友時代にはしたことがなかったので、それがボクたちの初デートに決まった。

午前の１０時に家の前で待ち合わせをして、ゆっくりと通りを歩き、西側の入口から公園に入ると、ブロック舗装された小路が続いていて、その左右にジャングルジムやブランコといった懐かしい遊具の並んだ広場があった。公園の奥は緑の芝生が一面に広がったなだらかな丘になっている。

「懐かしいね、小学生の時以来じゃない？」

「そうだね。昔はよくここで遊んだっけ」

「ブランコに滑り台、それからシーソー……遊んだなぁ」

「ふふっ。後で久しぶりに遊んでみる？」

歩きながら、更紗はブランコを楽しそうにこぐ子供たちに目を向ける。

「……ボクたち、もう子供じゃないんだよ」

「えー？　でもうるり、ホントはちょっと遊んでいきたいんじゃないの？」

「……なんで分かるの？」

「だってうるりの顔、ちょっと赤くなってるんだもの。遊びたくて、

でも恥ずかしくなって、そうなったんじゃないかなーって」

「うう……」

更紗には、ボクの気持ちはお見通しだったみたい。

そう。昔を思い出して、久々に遊びたくなっちゃった。

「子供じゃない」なんて強がってみるものの、ボクたちはまだ子供。

「いいじゃない、子供だって。……子供のほうが楽しいよ」

「そうだね。子供の方が気楽で、ずっと幸せそう。それじゃあ後で一緒に、子供に交じって遊ぼっか？」

「そうしよう」

そんな会話を交わしながら、ボクたちは丘の腹の、勾配の小さなところへ。

レジャーシートを敷いて、その上に横になった。

今日は青空の中をところどころにひつじ雲が浮かぶ、おだやかな気候の日だ。

「いい天気だね」

隣に寝転ぶ更紗に声を掛ける。

ボクたちは手をつないでいて、まるで空の中で一つになっているかのような感覚だ。

「風も気持ちいいね。ゆっくりと動く雲を見ているだけで、なんだか幸せな気分になる」

「……きっと、ボクたちがこうして繋がっているから、なんでも幸せな気持ちになれるんだと思う」

「うるり、結構臭いこと言うんだね」

「……もう、放っておいてよ」

「ふふっ、そうだ。さっそくだけど、サンドウィッチ食べる？」

うるりは体を起こして、手にしたバスケットを開いた。

朝ご飯からちょっと時間が経っていて、お昼にしてもいい頃だ。

「それじゃあ、いただこうかな」

ボクは更紗お手製のハムチーズのサンドウィッチをいただく。

「おいしい」

「ホント？」

「うん。更紗の作ったサンドウィッチ、愛情がこもっていて、本当においしい！」

「……ありがとう。あはは、食パンを切って、ハムとチーズを挟んでいるだけなんだけどね」

「もう、そういう空気を壊すことを言うんだから。ボクたち恋人同士なんだから、こういう甘々なやりとりをするものなの。でも……おいしかったのは本当だよ」

「ありがとう。……そうだったね。そういうベタ甘なやりとりをしてもいいのかもしれないね。でも、なんだか慣れないなー」

そんな風に食事を取ったり、何もせずのんびりしたり、遊具で遊んでみたり。そんな中に、今までの親友とは違う、恋人らしいやりとりが端々に出て来て、ボクは幸せの絶頂を迎えていた。

そう――その瞬間までは。

西の空に太陽が半分近く沈み掛かる、夕刻。

公園で素敵な時間を過ごしたボクたちは、帰路をゆっくりと歩いていく。

手をつないで、お互いのことを話しながら。

通りは、二車線でガードレールのない、交通量のあまりないところで、更紗が道路側を歩いていた。

会話に興じていたからなのか、ボクたちはその背後から迫り来る存在に途中までまったく気がつかなかった。

後ろで、激しいエンジン音が鳴り響く。

それに本能的な危機感を覚えて振り返って、ボクは愕然とした。

すぐ背後に大型トラックが近づいて来ていて――それは更紗のいる歩道へと突っ込んでくる勢いだった。

「危ないっ！」

叫んで、掴んだ更紗の手を引っ張る。

だが爆走したトラックはそれよりも早く歩道に進入し、更紗の体に激突した。

ボクは衝撃に耐えられず、彼女の手を離す。

そしてトラックは何事もなかったかのように車道に戻ると、走り去っていった。

まさに瞬間の出来事だった。
何が起きたかという感じだったが、大切な人が隣にいないということは真っ先に気がつく。

「更紗！！」

更紗の体は約２０メートル先に吹っ飛んでいた。
無我夢中で彼女の元に駆け寄る。

「さら……」

言葉を失う。
路上で横たわる更紗は、もうボクの知っている更紗ではなかった。
全身から血を流して、もうぴくりとも動かなかった。

「更紗……！！」

ボクは涙を流して、彼女にすり寄った。
これから二人の幸せな時間が始まっていくのに、どうしてこんなことに――！！

＊

結局、ボクはその後、更紗のいないひとりぼっちの世界に耐えきれず、死を選んだ。
トラックの前に飛び出して、更紗と同じように吹っ飛ばされて死んだ。
そして目が覚めると、彼女に告白をする日、更紗の意向を確かめるための小説を渡す前の文芸部の部室に戻っていた。
それからボクは、自分がループに巻き込まれていることを知り、

さらに――更紗に告白をして付き合い始めると、彼女が悲惨な死を迎えてしまうことを知ってしまった。
告白の仕方を変えても、どこでデートをしようと、結果は同じ。近いうちに更紗に死が訪れる。

初めのうちは、何度も何度もループを繰り返した。
きっと二人が幸せになれる世界があるはずだって。
でも……目の前で大好きな更紗が悲惨な死に方をしていくのに、心が耐えきれなくなって、１０回ほど世界を繰り返した頃、ボクはこのループを放棄した。
つまり、更紗に告白をせず、恋人同士にならない運命を選択した。

どうして恋人にこだわる必要があるんだろう。
ボクはそれに囚われて、大切な物を見失っていたような気がする。
別に恋人同士にならなくたって、これまでの親友っていう関係で満足。
どうせ女同士で付き合ったって、やがてそれは認められないっていう世界の掟にボクたちは従わざるを得ないんだから。

そうやって嘘をつくことで、ボクは自分自身をなんとか納得させる。
そしてボクは、更紗と永遠に友達でいることに決めたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2925dm/

この恋が実るまで、私は運命に立ち向かう

2016年8月29日02時05分発行